

教育
相談室

カウンセラーの窓から

「まさか、あの子が学校に行けなくなるなんて、思ってもみませんでした。」担任の先生からの紹介で、小学校四年生の航君（仮名）のお母さんが相談に訪れ、こう話されました。

「朝になると腹痛を訴えて登校を渋ります。叱って行かせたら、学校に着いておらず、慌てて近所を探し回った事もありました。思い切って休ませると、昼頃には食欲も出て表情も落ち着きます。でも、翌朝になると、やっぱりお腹は痛くなります。」相談を進める中で、航君の登校渋りには、祖母の入院が少なからず影響していることに、お母さんは気づきました。帰宅してから航君を見守り、忘れ物がないかと心配りをしてくれた祖母。しかし、急な入院で、このところ、お母さんの毎日はとても忙しくなっていたのです。

「おばあちゃん任せにしていたことを、今度は全部私がしな

見守られている安心感

くてはいけないと、つい厳しく言ってしまった。夫をあてにはできないし。」と、お母さん。「次回は、できれば、お父さんにもご同席をお願いできないでしょうか?」と、提案したところ、仕事をやりくりされ、二人揃っての相談となりました。



「今からでも遅くありません。航君の好きなことに付き合っただけでいいですよ?」というアドバイスに「今度の休日、

一緒にプラモデルでも作ろうって、誘ってみることにします。」とお父さんは話し、何度か実行されました。

お父さんが航君との時間を持つようになった事が、お母さんの不安を減らし、心のゆとりをもたらしただけでしょう。航君にも変化が現れ始めました。登校して保健室まで行けるようになり、やがて友だちや先生の誘いで、教室に入れるようになりました。

子どもの心は家族のあり方に敏感です。病气やけが、転居、新しい家族の誕生、兄姉の巣立ち、といった出来事で、普段と



変わらないように見えても、日常的にやれていた事が、できなくなる場合があります。親は困惑し、解決を急ぐあまり、言葉で説き伏せがちになります。しかし、様子をよく観て、受け入れる気持ちで関わることに、子どもには見守られている安心感が育ち、問題が解決されることとが多くあります。

(T・S)

家族のふれあい写真コンテスト

作品募集中



「家族」のつながりを写真におさめることを楽しんでみませんか?

- ★テーマ 家族のうれしい顔
- ★資格 小学校6年生以下のお子様を持つ、鯖江市にお住まいのご家族
- ★応募締切 平成22年2月1日(月)
- ★応募先 最寄りの公民館、もしくは教育委員会生涯学習課
- ★問合せ 生涯学習課 53-2256(直通)

詳しくは鯖江市のホームページへ!
<http://www.city.sabae.fukui.jp/pageview.html?id=8039>

発行
鯖江市教育委員会
鯖江市社会教育委員会
青少年健全育成鯖江市民会議
協力
丹南青少年愛護センター鯖丹支所

37号

じわっと効いてくる 子育てのヒント



鯖江東幼稚園
さつまいもの収穫



鳥羽小学校
校内マラソン大会



東陽中学校
体育大会



吉川小学校
吉川ふれあいまつり

子どもたちに聞きました

子育ての真っ最中には、あまりに子どもとの距離が近すぎて、子どもの姿が見えにくくなるものです。

子どもたちによかれと思っただけのこと、時には不満のもとになったり、自立を阻むものであったりする場合があります。子どもたちの声から、子育てのヒントを探ってみましょう。

今までは、素直に「はい」と返事をしていたのに、最近は「だって」と何かと口答えをする。黙って親の言うことを聞いていればいいものを。

お父さんは、いつでも「はい」と返事するように言ってくれど、私にだって言いたいことがある。私もいろいろ考えていることがあるのよ。少しは私の気持ちも聞いてほしいわ。

子どもにも子どもなりの思いや言い分があります。いつまでも幼い子どものままではありません。自立する時のために、自分で考え、判断する経験を積み重ねてやらねばなりません。子どもたちは聞いてもらえたことだけで、元気になるっていいものです。

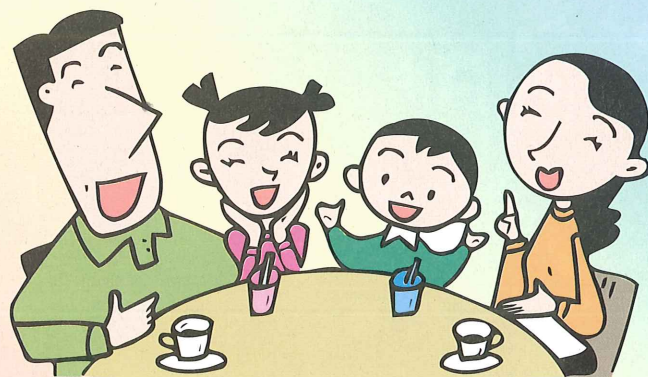


やっぱり、さっき頼んだことをまだしてない。何をしていたんだ。言っても、また返事をしない。まったくしょうがない子だ。



「やっぱり」とか「また」とか言うけれど、そうか、今までもそういう目で僕のことを見ていたんだな。どうせ僕はだめなんだな。ああ、やる気がでないよ。

どんなふうに見ているのか、子どもたちは親の言葉からそれを感じ取ります。上の例に出てくる「やっぱり」とか「また」という言葉は、子どもを決めつける親の見方が伝わってしまう言葉なのです。子どもを信じる温かいまなざしが大切です。



まるごと抱きしめて

涓滴

お子さんが誕生した時のことを覚えていらつしやるでしょう。「どうか元気に生まれてきてほしい。」願うことはただ一つ、そのことだけでした。新しく加わった赤ん坊の周りには家族が集まり、その笑顔の中心にいるのがお子さんだったはずでした。

わが子がかわいいのは、ご近所で評判のいい子だからでもなく、親の手を煩わせない素直な子だからでもなく、ただ「わが子」だからです。『五体不満足』の著者 乙武洋匡さんはその本の中で「先天性四肢切断で生まれた僕を初めて見たときの母の第一声は、ショックのあまり卒倒してしまうのではないかと周囲の予期に反した『かわいい』だった。」と書いています。縁あって自分たちのもとに生まれてきたわが子。どんなにやんちゃだろうと、口答えばかりする子だろうと、かわいいわが子にかわりありません。子どものよい面も悪い面も含めて、その子の存在そのものをまるごと認め、受け止め、抱きしめてやることを忘れてはならないと思います。

「涓滴」とは「しずく」という意味。しずくも集まれば、やがて大河となることの願いを込めて。

こんなに真剣に叱っているのに、ちつとも言うことを聞かないどうしようもない子。もうどう叱ればよいのかわからなくなりそうだわ。



この頃、お母さんはよく私をおこるけど、何に腹をたてているのか、どうして叱るのか、さっぱりわからない。もしかして、気分次第でおこっているんじゃないかしら。だとしたら頭にきちゃうわ。

なぜ叱っているのか、理由を言えば理解できることも多いはず。何が悪いのか、どうすればよいのか、感情にまかせて叱ってしまったら、話して聞かせましょう。叱り方は、難しいものです。○三分以上叱らない ○逃げ道も考えて叱る ○過去にさかのぼって叱らない この叱り方を参考にしてはどうでしょう。

親の思いと子の考えのすれ違い、これは昔からありました。子どもたちが少しずつ自立している証拠です。親はちよつと立ち止まって、このことを考えてみるのが大切ではないでしょうか。